

## 1. 秩序分析とは何か

私は、選挙関連のニュース番組をビデオに録画し、それをもとに分析を行った。この研究の特徴は、「相互行為の現場に入り込まずに、『作られた』データを用いて、まさにニュースが『つくりあげられている』場面を研究している」というところにある。我々は、ある番組を見るとき、番組内の登場人物たちの相互行為の秩序とともに、番組編成の秩序をも、理解可能なものとして視ている。つまり我々は、画面の中で一体何が起きているのかという問題とともに、その番組がどのように編成されているか（どのような画面が選択されているのか、どのようにCMが導入されているかなど）という問題も、あたりまえのものとして理解している。この理解可能な番組編成・画面の秩序を明らかにすることこそが、まさしく「今ここでつくりあげられている」場面を記述することそのものであり、私の論文の目標である。しかし私は、この「いかに番組が編成されているのか」を明らかにすることで、「番組が何か一方的に作為して、視聴者に押しつけをしているのだ」と主張するのではない。そうではなく、この「番組編成」を「視聴されるべき番組であること」への志向から成るものとして捉える。つまり「この画面を見ているであろう人々」へ向けに行われているところのものとして捉え、その上で、いかに番組が編成されているのかを読み解くのである。

## 1-1. 研究方法

6月2日から7月4日まで、選挙<sup>(1)</sup> 関連の番組を録画し、そのデータをもとに秩序分析を行った。衆議院選の投票日である25日を中心とした1週間（6月22日～6月27日）は各テレビ会社<sup>(2)</sup> からピックアップした定時ニュース及び緊急特番を録画。その他、新聞欄からチェックした番組をビデオに撮った。投票日当日の6月25日午後8時から翌26日の早朝にかけては、開票速報と特番を録画した。（表1参照）

録画した日	録画した内容
6/22～6/27の1週間 + $\alpha$	定時ニュース+緊急特番
6/25午後8時～6/26早朝	開票速報+特番

表1「録画日とその内容」

## 1-2. 先行研究の検討1：樫村の論文

まずはじめに、先行研究の検討として樫村の論文を紹介する。

樫村は「震災報道の会話分析」（樫村1999）において、阪神淡路大震災（兵庫県南部地震）の報道の録画データを大量に集め、それをもとに会話分析<sup>(3)</sup> を行った。樫村は、テレビニュースによって伝えられた、あるいは伝えられなかった「事実」がもたらした結果を問題にはしなかった。つまり、ある報道の語りによって、語られた人（もの）がどんな影響を与えられたか（その結果どうなったか）ということに焦点を当てたのではなかった。<sup>(4)</sup> 樫村が扱ったのは「伝え手の達成の問題や聞き手の記憶の問題ではなく、また、必

要な報道の在り方についての仮定に照らしてそれを批判したり擁護したりするという問題でもなく、日常的行為実践としての大震災報道がその報道行為の在り方としてなにをどのように述べたのかという問題」(櫻村 1999:150 傍点:石村)であった。録画されたデータを何度も繰り返し視聴し、そこに見られる形式その他の様々な詳細に注目し、それらの詳細がどのように関連し合って「あるニュース」を「伝え」ているのかを明らかにしていく。それこそが、櫻村が行った(震災)報道の会話分析であった。

また、櫻村は、語り(talk)という相互行為としての「視聴者が画面を見る経験」に焦点をあてた。その視聴経験の主要な構成要素は、画面それ自体(画像、音声)と視聴者自身である。テレビニュースには次のような諸形式がある。「標準ニュース」、「映像レポート」、「現地インタビュー」、「中継レポート」、「解説インタビュー」。これらに代表される形式は、個々の具体的な視聴経験に依存し、かつ個々の具体的な視聴されるニュースに依存する。つまり、テレビニュースの形式は、『視聴される具体的な「あるニュース」を、「ある視聴者」が視聴する』という具体的な行為から離れて説明されるものではない。それは「現象依存的(indexical)であり、現象内在的(reflexive)である」(櫻村 1999:153)。それゆえ、櫻村は会話分析という手法を用いたのであった。

この、「作られた」データを用いて、まさにニュース番組が「つくりあげられている」場面を研究するというやり方と、それに会話分析の手法を用いるという点について、私は櫻村の研究の大枠を利用している。この方法論をもとに、私は「選挙関連番組」を扱い、今、その場面における秩序がいかにつくりあげられているのかを、明らかにしていく。

### 1-3. 先行研究の検討2: 上谷の論文

今ひとり、私や櫻村のようにエスノメソドロジーの手法を用いてメディア研究を行っている人物として、上谷の論文を紹介しておこう。

上谷は以下のように述べている。「われわれは、日々、テレビというメディアが提供する様々な音声や映像と接するなかで、それをばらばらな音や画像ではなく、一連の出来事とみなしている。今画面で起こっていることを一連の出来事と見なしているということは、すなわち、われわれが視聴者として、画面に見いだせる音声や映像を、一定のやり方で組織化されているものとみなしていることの、あらわれであるといえる」(上谷 1994b:155)。

上谷(1994b)の要旨をまとめると、番組の参加者同士の画面内における相互行為が何かしらの出来事としてみなされるのは、番組内の人物と視聴者の間の相互行為によるものである。視聴者はメンバーシップカテゴリー化装置を用い、画面内の行為を「あるあたりまえのもの」として受け止める。その「今まさに作られている」ニュースは、「今まさに視聴されている」ことと、結びついている。「テレビ番組を理解するということは、社会的に組織化される現象である」(上谷 1996:100)。『テレビ番組をまさに「テレビ映像」としてテレビ的に見るという活動それ自体を、考察の対象にする』(上谷 1997b:237)。つまり上谷は、ニュースというものが一体何を伝えているのかという問題に対し、視聴者がカテゴリー化などを使って「あるあたりまえのもの」として受け止めるという行為そのものであるという提言をしたのである。

この上谷の視聴者に注目するという姿勢は、私の研究で言えばリスナー志向を考えていくという姿勢にあたるだろう。その画面、その場面がいかにしてその場で編成されている

かを読み解いていく、その作業をメディア研究に求める点で、私の手法と上谷の手法は似通った点を持つと言える。また、私も上谷と同様、テレビ番組視聴を「テキスト — 読み手」モデルで捉えようとする、従来のマス・コミュニケーション研究を批判する文脈にあることを主張しておきたい。

#### 1-4. 小括

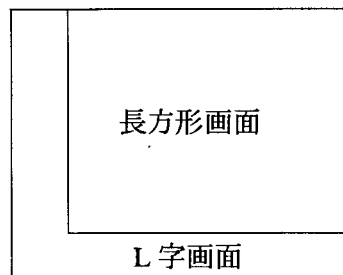
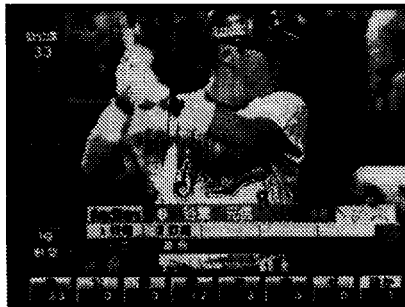
このように、私はエスノメソドロジーの手法を応用するかたちで、ビデオ分析を行っていく。繰り返すが、私がこの論文において明らかにしようとするのは、いかに番組が「視聴されるべき番組」として編成されているか、これである。それでは、第2節以下で、具体的な分析を示していくことにしよう。

### 2. 開票速報の画面分析 — 第42回衆議院選挙開票速報の特別報道番組から —

この節では、開票速報番組を用いて秩序分析を行う。画面の中に、いかに様々な形で情報が埋め込まれているか。画面がどのように理解可能になっているのか、記述していこう。

#### 2-1. L字画面分析 — 野球中継であり開票速報であること —

人々はL字画面<sup>(5)</sup>と長方形画面<sup>(6)</sup>からなる「1つのテレビ画面」を理解可能なものとして視聴している。画像データAを見て欲しい。これは「選挙スペシャル」(H12.6.25、FNN系関西TV、19:58～)の中の画面のひとつである。



画像データA (0:40:53、FNN、6/25 ①)

図1 「L字画面と長方形画面」

ここで注目すべきは、L字画面以外では野球の映像が流れている、という点である。しかし人々は、これが野球の放送をしながらも開票速報を伝えているのだということを十分に理解できる。この「野球放送」であり「開票速報」であることは一体どのように理解可能となっているのか。実は、人々はこの「1つのテレビ画面」の中に、2つの文脈を読みとっているのである。L字画面においては、現在の獲得議席数、最終予測、当確者情報などの情報が更新されつつ伝えられている。そして四角画面では、バッターの紹介、点数は何対何か、ノーアウトで・・・といった情報が伝えられ続けている。また、当確者情報の提示と共にでるポンという音声。この音声に対して、野球中継のアナウンサーは全く言及することなく中継を続けている。つまり音声上のまじわりあいが可能になっている（と想定されている）のである。このように、野球中継という文脈と、開票速報という文脈の2つがあるということ。これが、まさしくL字画面と四角画面を使うことによって、より明

確に視聴者にとって理解可能になっているのである。

2-2. L字画面分析 — 野球中継から開票速報へ —

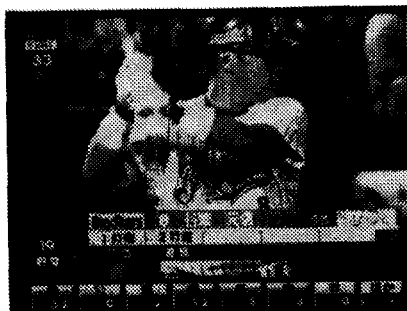
視聴者は、画像データ A のような画面に2つの文脈を読みとることで、それが野球中継であり開票速報であることを理解可能にする。しかし、それが野球中継であると同時に開票速報であるというのに、「野球中継から開票速報へ」という切り替わりが生じている。次のトランスクリプトを見て欲しい。なお、球場の背景音（観客の歓声など）は無視した。

断片1 0:40:40-0:41:01 B=球場の野球中継アナ M=スタジオの男性アナ A=スタジオの女性キャスター

横浜スタジアム	
1	B: 横浜スタジアム (0.4) 息を呑むようなシーンの (0.6) 連続です (0.6)
2	M:
3	A:
横浜スタジアム	
4	B: いったいいち (0.2) 両チーム (0.2) 譲りません (1) さあ: (0.2) 政治の世界=
5	M:
6	A:
横浜スタジアム	
7	B: =の (0.4) こちらの熱いところの方は現在どんな展開なんでしょう (0.6)
8	M:
9	A:
横浜スタジアム (画像A)	全国スタジオ (画像B)
10	B: 全国スタジオさん (.) どうぞ (1)
11	M: はい (0.6) え: : それでは (0.4) 選挙=
12	A:
全国スタジオ (画像B)	関西テレビ
13	B:
14	M: =情報を (0.6) お伝え致しま//す
15	A: //はい (.) 実はこの: 選挙スタジアムの方=

4行目に、野球中継をしていた人物が「さあ—政治の世界の、こちらの熱いところの方は現在どんな展開なんでしょう」と発話し、10行目で「全国スタジオさんどうぞ」と言った。それを受けて、全国スタジオのアナウンサーが、「えーそれでは選挙情報をお伝えいたします」(11-14行目)と発話した。このように、野球中継をしている者が開票速報について言及し、また開票速報のアナウンサーが選挙情報の伝達を宣言するというかたち。これはそれぞれお互いの番組への志向として見て取れる。つまり、10行目の「全国スタジオさんどうぞ」は、明らかに野球中継から開票速報へ、という志向の発話である。そして11-14行目の「それでは選挙情報をお伝えいたします」は、「今から選挙情報です」と言うことで、先刻までの「開票速報ではなかった放送」を志向していることになる。そして、画像Aと画像Bに注目して欲しい。

L 字画面  
(各党別  
当確  
議席数)  
→



小画面に  
なった  
野球中継  
←

画像データ A (0:40:53、FNN、6/25 ①) 画像データ B (0:40:58、FNN、6/25 ①)

「野球中継から開票速報へ」という志向が発話としてみられるこの場面。ここにおいて、画面は画像データ A から画像データ B へと切り替わった。L 字画面の情報と長方形画面の内容が入れ替わったのである。(但し野球は逆 L 字で画面つきになっている)

つまり、こういうことだ。「L 字画面と長方形画面に分ける」というテレビ画面の使われ方は、「野球中継であり開票速報である」ことを理解可能にしている。しかしそこにはまた、今どちらの番組がポイントアウトされているのか、という問題がある。そして、10 行目の「全国スタジオさんどうぞ」と 11 行目からの「それでは選挙情報をお伝えいたします」という発話に、「野球中継から開票速報へ」の志向を読みとるならば、この「今焦点が当たっている放送」は、長方形画面において伝えられるのだと言えよう。それは、長方形画面の音声は L 字画面に優先することからも明らかである。

ここまでで、L 字画面内の情報が関連しあっていること、L 字画面と長方形画面によって「野球中継であり開票速報である」ことが理解可能になっているということ、長方形画面において「より伝えるべき情報」が扱われているということを示した。そしてもう一つ重要なのは、このような画面の読みとりを可能にするべき志向が、「この画面を見ているであろう人々に向けられている」ということである。たとえば、先ほどの発話「全国スタジオさんどうぞ」や「それでは選挙情報をお伝えいたします」は、視聴者に向けてなされたものである。そして、L 字画面に何か大きく伝えるべきものがきたとき、L 字画面は長方形画面に（あるいは全画面に）置き換わるということ。この「伝えるべきもの」も、「視聴者が望んでいるところのもの」として選択されているのである。<sup>(7)</sup>

### 2-3. 小括

このように、一つの画面をみていくと、そこには様々なかたちで情報が埋め込まれている。また、L 字画面と長方形画面のように、2つの放送への志向がありながら、なおかつひとつの「放送されるべきテレビ画面」として作りあげられている。これら様々な画面の編集や番組編成は、まさしく「視聴されるべき番組」として「この画面を見ているであろう人々」に向けた画面編集、番組編成なのである。

### 3. 選挙討論であるということ

ここからは、選挙討論番組を扱い、そのなかでいかに画面が編集されているのかを明らかにしていく。その前振りとして、選挙討論についての若干の記述をしておこう。

### 3-1. 通常の討論

通常の討論においては、一体何が志向されているのだろうか。例えば、あるゼミで「夫婦別姓」についての討論を行うとしよう。そこでは様々な意見が出されることだろう。賛成派が「個人の自由だし、話し合っただけで自分の好きな方を名乗ればいい」と言えば、反対派は「子供の姓はどうするのか」「郵便が混乱する」と反論する。このような討論の中で目指されるのは、1つの結論を出すことである。どちらが、よりよい考えなのか。単純に言えば、どちらの考えが「勝つ」のか。そこには相手をやりこめる、といったことも含まれるだろう。あるいは、その結論は「両者の考えを踏まえた上でのよりよい考え」であるかもしれない。ともかく、通常の討論においては、あるテーマに対する是か非かの結論を求めること、これを、当事者たちのひとつの志向として見ることができる。

### 3-2. 選挙討論 — 視聴されるべき番組であること —

通常の討論が「あるテーマに対する何らかの結論を出す」ことへの志向をもっているのだとしたら、選挙討論では、一体どんな志向が見られるのだろうか。ここで確認しておきたいのは、繰り返し「志向」という言葉を使っていることから読みとってもらえると思うが、私は何か「これこそまさしく選挙討論だ」といった定義を見つけようと考えているわけではない。相互行為の場面に先行して「選挙討論とは一体何か」という問いかけをし、答えを用意するのは、本質主義的な考えにとらわれている。そうではなく、おそらく選挙討論というものをくまなく見ていったとき、一体そこで何が行われているのかということについて、何らかの志向をみてとれるであろう、という主張をしているのである。

さて、結論から言うと、このメディアを通じた選挙討論は、視聴されるべき番組として志向されている。あえて名前をつけるとしたら、リスナー志向と呼べるだろう。そしてその視聴されるべき番組であることへの志向のもとに、また様々な志向がある。たとえば、山場をもった選挙ドラマとして演出する、といったことがあるかもしれない。「かもしれない」といった表現になるのは、結局のところその志向が示せるだけの場面の証拠がなければ、はっきりと主張することはできないからである。4節では、「対立構図の明確化」という選挙討論におけるひとつの志向を、「視聴されるべき番組としての志向」の中のひとつとして論じていく。意見の一致が、常に志向されているわけではない。そして、この対立構図の明確化というものも、実は話の文脈やその他の様々な秩序とともに、「画面がいかにかに選択されその場面を作り上げているか」ということと深く結びついているのだ、ということをも主張する。

#### 「視聴されるべき番組であること」

- ・ 政党または与野党間の対立構図を明確にする
- ・ 山場をもった選挙ドラマとして演出する など

図2 「選挙討論番組における構造化される志向」

### 4. 選挙討論における秩序分析

さて、4節の本題に入る前に、再び画像データ A を見て欲しい。この L 字画面に注目すると、L 字画面の下部分に現在の獲得議席数が、そして左の部分に自公保と野党の獲得議席数が、棒グラフであらわされている。ここでは、下側の各党の獲得議席数が、左側

の棒グラフによって「自公保」(赤色棒グラフ)と「野党」(青色棒グラフ)の獲得状況、すなわち与党 vs 野党という対立構図に置き換えられているのである。ここにL字画面が左側と下部分の二対から成っていることの有意味さを見て取ることができる。このように、1つの画面内において、見やすい形としての「多数の政党→与野党対比的秩序」を見て取ることが出来る。しかし、この「与野党対比的秩序」は、静止画面のみに表れているのではない。それは、画面のシーケンスの中にも、そしてスタジオ内の相互行為においても見て取ることが出来るのである。それでは、今から画面のシーケンスに注目して、いかに対立構図がつくられているか、いかに選挙討論が編集され作り上げられているのかを明らかにしていこう。画面のシーケンスとは何か。まず4-1. で説明していこう。

#### 4-1. 選択的畫面編集

画面のシーケンスとは、画面と画面の連鎖のことである。「一つ一つの画面がどのように選択されているか」という問題は、実は、画面同士がどのようなシーケンスを持っているかという問題でもある。画面のシーケンスを詳細に追っていくことで、様々な秩序が見いだされる。この画面のつながりについては、上谷が示唆しているところ<sup>(8)</sup>でもある。上谷(1994a)は最後に、「画面の転換」(上谷 1994a:5)について、「今後改めて詳細に考察しなければならない、残された課題である」(上谷 1994a:6)と結んでいる。

私は、この画面のシーケンスへの注目が、選挙討論における場面の秩序を分析する上で、非常に重要な視点になると確信している。今どんな画面が映し出されているのか、そしてその画面がどのような志向のもとに選択されているのかを読みとること、そしてその画面が、画面シーケンスという観点において編集されているかを明らかにすることが、その場面そのものを深く記述することにつながっていくのである。

この選択的畫面シーケンス編集について、若干の説明を付け加えておこう。この画面の選択について、次のような批判がされるかもしれない。つまり、その画面はたまたま映っていただけで、そのような画面の連鎖を追っても詳細な分析などできない。しかし、図3を見てもらいたい。これは、以下の分析で用いる「サンデープロジェクト～総選挙スペシャル第1弾 “争点は何だ”」(平成12年6月4日放送、ANN系ABCテレビ、10:00～)のスタジオにおけるカメラの配置図である。カメラ1は、与党席の後ろに、カメラ2は田原に対して正対する位置に、カメラ3は野党席の後ろに配置されている。



画像データC「スタジオ全体」

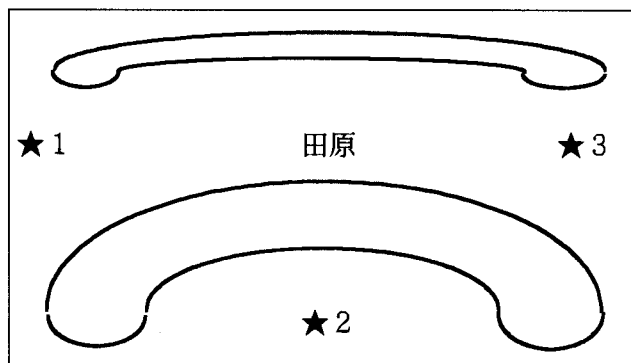


図3「カメラの配置図」

★x = カメラ

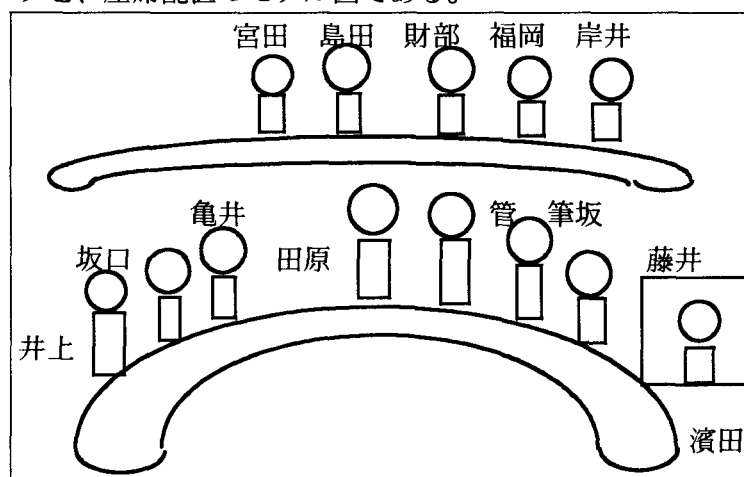
このテレビ討論において、今どの画面が映し出されるのかという問題は、1台のカメラがどちらを向くかと言った問題だけではない。カメラ1は野党側を、カメラ2は全体、あるいは個々の人物を、カメラ3は与党側を、絶えず撮影し続けているのであり、実際にどの画面が放送されるのかは、複数台あるカメラの映像の中からの選択になっている。そして、「画面が常に選択を受けている」と主張するに足るだけのカメラの台数は十分にある。無論、それでも完全に「たまたま」の可能性を排除することは不可能であるが、しかし個々の場面の文脈、その他様々に詳細な秩序の一つ一つを積み上げていけば、十分に説明可能な証拠として扱えるのである。

そして、この「画面の選択」は、すなわち、どのように画面をつなげていくかという点における「編集」作業である。画面シーケンスを追うと言うことは、そのシーケンスによってどのような場面の秩序が明らかになるのかという問題とともに、その場面がどのように編集されているのかを読み解いていく作業なのである。

#### 4-2. 座席配置

それではまず、分析に入る前に、スタジオ内の座席の配置に触れておこう。以下は、スタジオ全体を写した画像のデータと、座席配置のモデル図である。

図4「座席の配置図」



通常、対面する座席の配置は、そこに座る人物を対立的に描く。それは、対面する座席に座ることで、体の向きが対立するからである。例えば、私たちは、全く相手の側に体や視線を向けずにその相手を批判したり糾弾したりする姿は想像しにくい。座席の配置は、その配置を選択したこと自体によって、対立・非対立の構図を描きうる、秩序の一つであり、この場ではまさにそうした対立の秩序が利用されている。

さてもう一つこのスタジオの特徴的な座席配置にふれておこう。ここでは7党幹部と田原が手前の席に、そして宮田、島田、財部、福岡、岸井の5人が奥の席に座っている。この、後ろに位置する5人は、実は視聴者の代弁者として扱われているのである。これについては、4-6. で詳しく述べる。このように、スタジオ内の座席の配置も、討論における場面の秩序を構成する1つの要素となっているのである。

#### 4-3. 連立与党

公明党と保守党は、画面シーケンスのなかで、与党であるところの公明党、というよ



うに位置づけられている。そして更に、それが野党との対立シークエンスを持ったとき、「連立与党」という枠組みを与えられる。まず4-3-1. では、与党であるところの〇〇党というカテゴリー付けを明らかにし、その上で4-3-2. では、それが野党との画面シークエンスを持ったとき、どのように連立したものとして扱われているかを記述する。

4-3-1. まとまりの選択

画面シークエンスを追いながら、公明党や保守党が与党であるところのものとして扱われていることを記述していく。なぜ自民党が出てこないかという、実は自民党は与党→自民党という枠組みを受けないのである。そしてまた、与党の中でも、自民党だけは単独で野党としての対立構図を構成し得るからである。これについては、4-5. で述べる。それでは、断片2を見て行こう。これは、故小渕前総理の経済政策をどう評価するかについての議論の一部である。

断片2 画面ナンバー 174-179、0:25:56-0:26:14

T=田原 F=筆坂(共産党) K=亀井(自民党) S=坂口(公明党)

174 (田+民共由)		175 (田原)	
1	T: 小渕さんが	(0.2) 登場したときよりも	(0.4) 今景気は悪くなってる
2	F:		私は=
3	K:		
4	S:		
176 (共産)			
5	T:	今は	はい、反論
6	F: =悪くなってると思う	私は悪くなってると思ってる	
7	K:		へえ:
8	S:		
177 (田原+民主+共産+自由)			
9	T:		
10	F:		
11	K:		
12	S: いやそれはそんなことはないですね (.) 小渕さんがですね (.) 登場された=		
178 (自民+公明+保守)		179 (公明)	
13	T:		
14	F:		
15	K:		
16	S: =直後は大変金融危機の真っ	最中で (1) あの (.) いわゆる金融国会で=	
179 (公明)			
17	T:		
18	F:		
19	K:		
20	S: =あれだけのことをやったわけですから		

N.O	時間	備考	田原	自民	公明	保守	民主	共産	自由	社民	宮田	島田	財部	福岡	岸井
174	0:25:51		■				■	■	■						
175	:59														
176	0:26:03							■							
177	:05		■				■	■	■						
178	:08			■											
179	:12				■										

表2 「画面シーケンスのタイムテーブル」 (174-179)



画面 177



画面 178



画面 179

1行目で、田原がそれまでの筆坂の発話を受け、「小淵さんが登場したときよりも今景気は悪くなってる（ということですね）」と言い、2-6行目で筆坂は「わたしは悪くなってると思ってる」と述べた。その反論として、12行目から公明党の坂口の発話が始まった。ここで注目すべきは、画面ナンバー 177（田原+民主+共産+自由）から 178（自民+公明+保守）、179（公明）への切り替えである。画面ナンバー 177の時点で、坂口は12行目の発話「いやそれはそんなことはないですね・・・」を開始していた。現在の発話者である坂口に注目するという志向に従えば、画面 177の直後に画面 179がくるだろう。ところが、画面 177と画面 179の間には、画面 178が配置されていた。177-179というシーケンスではなく、177-178-179というシーケンスが選択された。この画面 178と画面 179とが、何らかの関連をもってつながられていたと考えられる。178と179のつながりとは何か。「自民+公明+保守」の画像の後に公明党の画像が続く。それはすなわち、「自民+公明+保守」という選択された1つのまとまりの中の「公明党」という位置づけである。このように、この場面では、「自民+公明+保守」の画面に公明党の画面が続くことにより、「与党であるところの公明党」という枠組みが与えられていたのである。

さて、この場面には、もう一つ注目すべきところがある。それは、この場面の文脈と画面 178との繋がりである。1行目からの発話を追っていけばわかるように、この場面には、小淵経済政策の是非を問うていくという文脈がある。この文脈と、178の画面のバックモニタに映し出された、株を持ち上げる小淵の映像は、シーケンシャルに結びついているように見える。株を持ち上げる小淵氏の映像は、小淵が株価の上昇、ひいては日本の景気の回復を願って積極経済をすすめたという当時の様子を語るものである。ところで、このバックモニタの小淵映像は、先ほどの記述に対する一つの反論を呼び起こすかもしれない。画面ナンバー 178（「自民+公明+保守」）へ変わる直前の画面 177（田原+民主+共産+自由）において、トランスクリプト 12行目の「小淵さんがですね」という発話があったからこそ、そのシーケンスによって小淵バックモニタ映像が選択されたのではな

いか。坂口が映っているのは、彼が発話しているからであり、残りの自民と保守は、小渕画像のおまけとして、たまたま映っただけではないか、と。しかし私は、更にこれに反論する。4-1. で述べたとおり、この選挙討論番組においては、つねに画面の選択が行われている。配置されるカメラの台数は、画面を十分に選択可能にしている。しかし、それはあくまで、画面の中に確かに映されているところのものに対する選択において十分だといえるのである。つまり、これは1つ1つの画面に依存するのだが、たとえば、その画面のはしに何か映っていたり、あるいは良く判別できないものが映っていたりしたとき、果たして本当にそれが選択されたと言えるのか、という問題である。

確かに、小渕経済政策の文脈とモニタの結びつきは、もし本当にそのような証拠があれば、シークエンシャルであり、その文脈と画面選択もシークエンシャルであると言えるだろう。だが、ここには、背景であるところの小渕モニタと、小渕経済政策についての文脈とを、画面シークエンスという観点においてシークエンシャルであると十分に記述するだけの証拠はない。このモニタそのものについてのシークエンシャルな言及や、このモニタ自体がクローズアップされるといったことは見られなかった。先ほどの批判に対しては、むしろ背景であるこのモニタの方が、「この場面ではたまたま映った」という反論をうけるだろう。それに対して、この「自民+公明+保守」→公明党という画面の選択は十分にシークエンシャルであるといえる。なぜならば、この選択は、まさしく4-1. で述べたように、十分なカメラ台数による十分に選択可能な画面シークエンスの編集によるものだと言えるからである。

#### 4-3-2. 対カテゴリーとしての与野党

さて、ここからは、公明党と保守党が連立与党の枠組みを使って対立構図を描いている様子を記述していく。それでは断片3を見ていこう。

断片3 画面ナンバー 41-43 0:10:36 - 0:10:53 与党3党VS共産  
T=田原 F=筆坂(共産)

41 (共産)		42
1	T :	
2	F : やはり今の憲法と両立しない (.) そういう : 人物が首相の座に座って	それ=
42 (自民+公明+保守)		
3	T :	
4	F : =を自公保がかばっていると (0.4) だからこれに対する審判下していくと :	
43 (共産)		
5	T : はい	
6	F : ゆ : ことですね その上で私たちとしてはいわゆる21世紀 (我々を) =	
43 (共産)		
7	T : うん	
8	F : =大きくのばして欲しいと ゆ : 事を訴えていきたいと (.) こう思ってます	

N.O	時間	備考	田原	自民	公明	保守	民主	共産	自由	社民	宮田	島田	財部	福岡	岸井
41	0:10:36							■							
42	:43			■	■	■		■							
43	:48							■							

表3 「画面シーケンスのタイムテーブル」 (41-43)



画面 41 0:10:37 → 画面 42 0:10:45 → 画面 43 0:10:49

ここでは、「共産（画面 41）→自民+公明+保守（42）→共産（43）」という画面シーケンスが見られた。つまり、共産と、自民+公明+保守とが、何らかの関連をもって画面として繋がれていた。さて、ここで4行目の筆坂の発話「自公保がかばっていると」と、画面42の、「自民+公明+保守」というまとまりに注目して欲しい。筆坂の発話の2行目から4行目にかけて、画面が41から42に移っている。ところが、共産（41）から自民+公明+保守（42）への画面の切り替えは、4行目の「自公保がかばっていると」の発話に先行して起きているのである。

もし仮に「共産→自民+公明+保守」という画面の切り替えが、「自公保がかばっていると」の発話の後に行われたのであれば、それは、「自公保がかばっていると」という発話とのシーケンスによって（筆坂が自公保と言ったから、それを受けて）自民+公明+保守の画面が選択された、ということになる。しかし、実際には、「自公保がかばっていると」よりも前に画面は切り替わっていた。それはつまり、むしろそのような発話がなくとも、「共産党」と、「自民+公明+保守」というまとまりは、何らかの対比として扱われ得た、ということである。

この場面での「何らかの対比」とは何か。それはすなわち「共産党」と「自公保」の対立構図である。その証拠は、両者の対立する体の向き、そして4行目の「自公保がかばっていると」と「審判下していく」といった発話に見てとれる。「自公保がかばっていると」の発話は、「自民+公明+保守」というまとまりに「自公保」という名前を与えた。そして「審判下していく」の発話は、共産党は森首相を信任する「自公保」を批判する、という対立的な文脈を呼び込んだ。

何らかのまとまりとして選択された「自民+公明+保守」の画面は、それが選択されただけでは、まさしく「何らかのまとまり」であるところの「自民+公明+保守」がそこにある、ということではしかなかった。しかしそれは「共産党→自民+公明+保守→共産党」という画面シーケンスを持ち、そして筆坂の発話から、共産党と「自民+公明+保守」は対立するという文脈を持った。そして、「自公保」と呼ばれた。ここにきて初めて、「自

民+公明+保守」の画面は、「連立しているところの与党」という画面であるとみなされた。繰り返すと、第1に「自民+公明+保守」というまとまりが選択された。第2にそれは野党との対立的な画面の並べ方（画面のシーケンス）によって、そして座席配置、対立的な文脈などの詳細によって、「連立しているところの与党」と位置づけられた。

この「連立しているところの与党」は、ここでは「自公保」と呼べる。しかし、ここで言っておきたいのは、自公保という言葉、あるいは連立与党という言葉そのものが重要なわけではない。つまり、選挙の文脈における「連立」しているとはどういうことかという、それは与党が一致して何か政策を野党と争っている、という行為そのものから言えることなのである。野党が政策を争う相手として「自民+公明+保守」を選択できる、対立的に闘える、というまさにその行為が、「カテゴリーに結びついた行為」（高山 1995:149）「category bounded activity」として、「連立」していることに結びついている。その「連立しているところの与党」を、人々がそう呼んでいるのなら「連立与党」と呼ぼう、「自公保」と呼ぼう、というだけの話なのである。

ところで、実はこの断片が意味するところはもう一つある。すなわち、共産党は、共産党1党のみでも自公保・連立与党に対立し得る。つまり、野党は1党でも、野党として対立構図を構成し得る。次の4-4. で分析していこう。

#### 4-4. 野党連合でなく

ここまで、公明党と保守党が単に「与党の中の〇〇党」という位置づけをされるだけでなく、野党との対立的画面シーケンスによって、「連立与党」と扱われることを明らかにした。それでは、野党は、どのように扱われているのだろうか。実は、与党とは逆に、野党は決して「野党連合」とは扱われていない。つまり、野党は「連立」して（「野党連合」となって）いるわけではない。野党は、他の野党と政策を一致して闘う必要もない。野党はただ1党でも野党として扱われる。その根拠は、次の3つの事実に見いだすことができる。第1に、与党3党VS野党1党という画面がシーケンスの中で適切になっている。第2に「野党全体（4党が映るシーン）」のショットが与党との対立シーケンスを持たない。そして第3に、選択可能な「野党全体」は、しかし選択されていない。以下で順を追って記述していこう。

##### 4-4-1. 与党3党vs野党

再び断片4を見てみよう。ここでの画面シーケンスは、「共産党(41)→自公保(42)→共産党(43)」となっている。ここで、共産党は、ただの1党でも、自公保という連立しているところの与党を相手に対立している。つまり、共産党は1党でも野党として扱われている。「野党として扱われる」とはどういうことかという、それは、与党に対して画面のシーケンスから対立構図を構成しうる、ということである。野党は1党でも、野党として対立構図を構成し得る。自民党を除く与党は、連立与党の枠組みを使ってでしか野党と対立し得ない。つまり、公明と保守は、画面のショット的に単独としての価値を認められていない。しかし野党は、与党VS野党という対立構図を示すのに、連立3党VS野党全体、という画面シーケンスを使う必要はない。それはすなわち、野党は連合しているわけではなく、1党でも野党足り得る（対立し得る）という証拠そのものである。

4-4-2. 野党全体

ここでは、「与党全体」の画面の使われ方と「野党全体」の画面の使われ方との違いから、野党が野党連合ではない（野党は連立してはいない）ことを記述する。

「野党全体」の画面はどのように扱われているのか。結論から言うと、「野党全体（4党が映るシーン）」のショットは、与党との対立シークエンスに埋め込まれていない。断片4を見ていこう。これは、課税最低限の引き下げについての議論の一部である。

断片4 画面ナンバー 305-307、0:43:13 - 0:43:32

T=田原 J=藤井（自由党） K=亀井 H=濱田 F=筆坂

305 (共産)	
1	T :
2	K : //あのね : 田原さんね :
3	J :
4	F : 何でこれが高いと言えるんだと (.) 私は絶対反対//だ
5	H :

	305 (共産)	306 (民主+共産+自由)	307 (自由)
6	T :		うん
7	K :	こう思ってますね (.) あの : :	むしろ =
8	J : わたくしはね (.)		
9	F :		
10	H : 田原さん		

307 (自由)	
11	T : うん
12	K :
13	J : =これ公明さんともやったんですけどね (0.4) 所得控除でやるよりは =
14	F :
15	H :

307 (自由)	
16	T :
17	K : //そういう考え方(は)そういう考え方(は)
18	J : =手当てが出した方が合理的である//という基本的な考え方があるんですよ
19	F :
20	H :

NO	時間	備考	田原	自民	公明	保守	民主	共産	自由	社民	富田	島田	財部	福岡	岸井
305	0:43:11														
306	:18														
307	:21														

表4 「画面シークエンスのタイムテーブル」 (305-307)

4行目の筆坂の発話の「これ」とは、現在の課税最低限のことである。現在の課税最低限は購買力平価と為替レートから見れば決して高くはないと共産党は主張。それに対し、藤井は、課税最低限という控除の形よりも手当ての形を取った方が合理的である、と話し

始めた。さて、ここで画面ナンバー 306 と 307 のシークエンスに注目して欲しい。  
 共産党 (305) から切り替わって「民主+共産+自由+社民」(306)、そして自由党 (307)  
 というこの画面の切替は、野党であるところの自由党、という枠組みを与えている。しか  
 しこの画面においては、あくまで野党であるところの自由党、というそれだけにとどまっ  
 ている。つまりこの画面のシークエンスを追うと、この野党全体の画面は、シークエンス  
 として与党との対比になっていない。シークエンスとして与党と対立されていないと言  
 うことは、すなわちこの野党全体が映った画面は、野党連合として与党と闘う、といった活  
 動とは端的に結びついていない。つまり、野党は野党全体がうつった画面が与党と対立シ  
 ークエンスを描かないと言う点において、野党連合ではないといえるのである。

#### 4-4-3. 野党1党

仮に、野党というものを示すのに4党すべてが映った画面が必要ならば、常にその「野  
 党全体」の画面が選択される筈である。その選択が可能であるだけのカメラは十分にある。  
 それが為されないということは、すなわち野党は「野党連合」にはなっていない、という  
 ことである。このように、野党は一党でも野党。「与党と対立するもの」として扱われて  
 いるのである。

#### 4-5. 与党=自民党 — 秩序のかたち —

さて、実は自民党は、他の与党である公明党や保守党とは違う扱われ方をされている。  
 何か名前をつけるとしたら、それは与党の代表、となるのかもしれない。ともかくも、自  
 民党は、公明や保守とは違う画面シークエンスを与えられている。ここではその証拠の一  
 つ<sup>9)</sup>を紹介しておこう。

自民党は与党→自民党という枠組みを受けない。一見画面シークエンスとして「与党→  
 自民党」が来るように見える場合には、実は別の秩序が働いているのである。

断片5を見てみよう。これは、国のかたちを地方分権国家に変えていくことについての  
 議論の中で、管が「そんなこと亀井さんにできっこない」と発話した場面である。

断片5 画面ナンバー 111 - 113、0:17:57 - 0:18:08

K=亀井 N=管

111 (民主)		
1	K :	////できっ=
2	N :	いやだから全然 ( ) 亀井さんが賛成できっこないじゃないです////か
111 (民主)	112 (自民+公明+保守)	113 (亀井)
3	K : =こ	5 千億=
4	N :	
あなたそんな決め (.) 決めつけんのは失礼だよ : だって :		
113 (亀井)		
5	K :	////あなただけ ( - )
6	N : =	をまた////ばらまきに (.) 地方にばらまくんじゃないんですか

N.O.	時間	備考	田原	自民	公明	保守	民主	共産	自由	社民	宮田	島田	財部	福岡	岸井
66	0:13:29														
67	:33														
68	:37														
N.O.	時間	備考	田原	自民	公明	保守	民主	共産	自由	社民	宮田	島田	財部	福岡	岸井
77	0:14:22														
78	:33														
79	:39														
N.O.	時間	備考	田原	自民	公明	保守	民主	共産	自由	社民	宮田	島田	財部	福岡	岸井
111	0:17:55														
112	0:18:01														
113	:05														

「画面シーケンスのタイムテーブル」表5 (66-68)、表6 (77-79) 表7 (111-113)



画面 111



画面 112



画面 113

ここで注目すべきは、先行する 66-68、そして 77-79 の画面シーケンスたちである。66-68 と 77-79 には、4-4-1. のような与党3党vs野党1党の画面シーケンス、すなわち「民主(＋田原)→自民＋公明＋保守→民主」が存在していた。<sup>(10)</sup>そして、実はこの場面においても、地方分権について民主と与党の対立という引き続いた文脈に基づき、その枠組みが用意されていたのである。民主→「自民＋公明＋保守」→民主という枠組みは用意されていた。そこに2行目の管の発話「亀井さんが賛成できっこないじゃないですか」が為されたために、亀井の映っている画面を選択するという志向が生じたのだ。ところが、民主→「自民＋公明＋保守」→民主という枠組みをつくるところに急に「亀井さんが」という発話が入ったため、すぐには亀井を映したカメラに切り替えることができなかった。そこで、亀井のショットが入るまでの遅延(delay)部分に「自民＋公明＋保守」が登場し、それからようやく亀井のショットが間に合って登場する、というかたちになったのである。つまり画面ナンバー113で映っていたのは、自民党ではなく、2行目の管の発話を受けて、端的に亀井個人であった。この場面では、一見して「自民＋公明＋保守」→自民という画面の連鎖が、「与党であるところの自民党」というシーケンスを持っているように見える。しかし、実は民主→「自民＋公明＋保守」→民主という枠組みへの志向に突如「亀井さんが」の発話が乱入したため、民主→「自民＋公明＋保守」(亀井のショットまでのdelay)→亀井というシーケンスになっていたのである。

#### 4-6. 視聴者の代弁者

ところで、この選挙討論は、何者かに見られることを志向されて作り上げられている。



たとえば、CMの開始時における田原の「はい、CMです」という発話、これはこの討論を見ているところの人々に向けられたものである。その人々とは、討論をしている幹部たちと田原の後ろの席に座っている人々であり、また、この選挙討論を画面を通して見ている人々のことでもある。その、画面を通して見ている人々は、視聴者と呼ばれる。そして、このスタジオにおいて、奥側の席に座っている人々は、その視聴者の代弁者として扱われているのである。以下の断片6を見て欲しい。

断片6 画面 602-603、1:15:53 - 1:16:04 T=田原 K=亀井(自民党) B=島田

602 (自民)		603 (島田+宮田)
1	T: しんさ:ん わかる (0.4) 今やってること	
2	K: わかんない	//か
3	B: はい	//はい(.)
603 (島田+宮田)		
4	T: //非常にわかりやすいと思う	
5	K: 【首を振る】 【nod】	//ふh=
6	B: いやいやあのう:う://ん: ええ(.) //でも(.)	
603 (島田+宮田)		
7	T:	
8	K: =ふhふh	
9	B: =あの:我々(のがわ)としてはね:やっぱり今回の選挙はほんと大切や=	
603 (島田+宮田)		
10	T:	
11	K:	
12	B: =思いますね	

NO	時間	備考	田原	自民	公明	保守	民主	共産	自由	社民	宮田	島田	財部	福岡	岸井
602	1:15:51			■											
603	:55										■	■			

表8 「画面シークエンスのタイムテーブル」 (602-603)

この1行目の発話「わかる一今やってること」は島田を名指ししているが、島田をはじめ、後ろの座席にいる人々に向けられたものである。しかし、この発話は、まさしく、今この画面を見ているところの人々に向かってなされているものでもある。つまり、今この画面を見ているところの人々に対して直截に語ってはいないが、そのかわりとして、後ろの座席にいる人々に向かって語っているのである。

このように、討論者たちの後ろ、いわば背景の中に居る人々は、その座席配置から、今この討論を見るものとして、今画面越しにこの討論をみるものと同じ扱いを受けているのである。また、CMの導入において、CM開始時とCM終了時には、カメラをひいていって全体を映す、あるいはカメラをズームインしていき最終的に田原を映す、という画面の動きが見られた(表9)。これは、全体の空間を志向しており、このスタジオ全体の座席

配置からなる1つの構図を志向しているといえよう。

N.O	時間	備考	田原	自民	公明	保守	民主	共産	自由	社民	宮田	島田	財部	福岡	岸井
141	0:20:53	画面142～	■												
142	:58	145まで	■	■			■				■	■	■	■	■
143	:58	カメラの	■	■			■				■	■	■	■	■
144	:58	切替無し	■	■			■				■	■	■	■	■
145	:58		■	■			■				■	■	■	■	■
146	0:21:01	CM開始													
147	0:23:02	CM終了													
148	:03	画面148～	■												
149	:04	153まで	■												
150	:06	カメラの	■												
151	:08	切替無し	■	■			■				■	■	■	■	■
152	:09		■	■			■				■	■	■	■	■
153	:11		■	■			■				■	■	■	■	■

表9 「画面シーケンスのタイムテーブル」 (141-153)

#### 4-7. 小括

4節をまとめると、まず選択的畫面編集と座席配置から、画面シーケンスを扱うことが分析的に非常に有意味であることを述べた。そして分析として、与党であるところの公明・保守、野党一党としての民主・共産・自由・社民、与党の代表としての自民、視聴者の代弁者としての背景の人々、といった構図<sup>(4)</sup>を「画面シーケンスの扱われ方」によって示した。すなわち、いかに画面がシーケンスという点において編集されているかを明らかにしたのである。

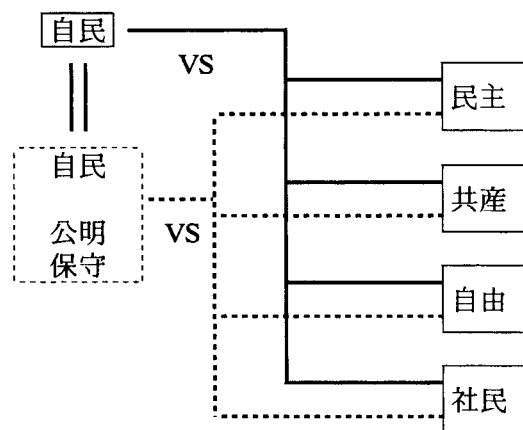


図5 「各党の扱われ方の相関図」

- ①公明と保守は、連立与党の枠組を使って初めて野党と対立できる
- ②民主、共産、公明、保守は、野党一党として対立構図を描ける
- ③自民党は与党の代表として扱われる

#### 5. 全体のまとめ

ここまで、第1節では、なぜビデオ分析をするのか、そして何を明らかにするのかを論じていった。第2節では、如何に画面に様々な情報や様々な構図が埋め込まれて配置され、また一つの「放送されるテレビ画面」として扱われているかを記述した。続く第3節・第4節では、選挙討論において、その文脈、また画面シーケンスに対立構図を見て取るこ

とが出来るといふ記述を行つた。政党の秩序について、静止画面においても読めるし、画面のシークエンスにおいても読めるし、またスタジオ内の相互行為においても言語化されている、ということ进行分析したのである。私がこの論文を通して明らかにしたのは、いかに番組が、画面が編集されているかということであつた。テレビに映し出される1つの画面には、様々な情報が秩序だつて埋め込まれている。そしてその秩序だつた1つの画面たちは、選択的にシークエンスを与えられることにより、また1つの秩序を組織化していく。この非常に興味深い秩序の成り立ちは、今後様々に分析されていくところであろう。

最後に、この論文を作成するに当たつて大変お世話になつた、国際キリスト教大学の岡田講師、そして明治学院大学の中村講師に謝辞を述べたい。また現代国際社会分野の学生仲間、指導をお願いした榎田教官にも、この場を借りて感謝の意を伝えたい。

#### ▼注

- (1)選挙関連番組を素材として扱つた理由は3つある。第1に、選挙には多くのカテゴリーが用いられており、カテゴリー分析を行うのに適している。第2に、6月25日と日付が決まつており、狙つて録画をしやすい。第3に、選挙には社会性があり、それなりに注目を浴びて見られる報道である。
- (2)フジテレビ系関西テレビ、TBS系毎日放送、日本テレビ系読売テレビ、テレビ朝日系ABCテレビ、NHK、日本テレビ系四国放送の5つである。
- (3)例えば1999年、あるニュース番組が「T市の野菜が危険だ」という報道によって、住民に深刻な影響を与えた事があつた。しかし本研究においては、このような伝えられた/伝えられなかつた事による結果や、その是非を問うのではない。また、いわゆるアナウンス効果、勝ち馬への同調効果(バンドワゴン効果)や、接戦候補への同情効果(アンダードッグ効果)のような、報道の及ぼす影響を議論するのでもない。
- (4)この呼称は、番組内において言及されている。
- (5)L字画面と区別するため、石村が名付けた。
- (6)上谷(1994b)は、「次の話者になりうる人物が何も語らない」画面が、まさにその場面で選択されること、そしてそれが「先刻までの話者」の画面とシークエンシャルに結びつくことで、「質問のやりすごし」という行為が浮かびあがると分析した。
- (7)この部分の詳細は次稿を期したい。
- (8)このほか、自民党は与党全体と等値に扱われる。
- (9)田原は、発話が対立的でない場面では、対立構図に影響を与えない者として扱える。
- (10)現政権との対立者としての田原、などの分析が存在する。

#### <トランスクリプト記号一覧>

B = 島田 紳助 (SPの司会)	与党: 自民党	K = 亀井
宮田 佳代子 (SP司会のサポート)	公明党	S = 坂口
T = 田原 総一郎 (討論会の進行役をつとめる)	保守党	I = 井上
岸井 (毎日新聞編集委員)	野党: 民主党	N = 菅
福岡 (白鷗大学教授)	共産党	F = 筆阪
財部 (経済ジャーナリスト)	自由党	J = 藤井
	社民党	H = 濱田(中継で参加)

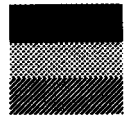
#### ○会話・行動に関する記号

- // 複数行の同列に置かれたスラッシュ: 参与者達の言葉の重なりが始まる箇所を示す  
 = 言葉と言葉の間、行末と行頭におかれた等号: 途切れのない言葉の繋がりを示す  
 (数字) 丸括弧で括られた数字: その数字の秒数だけ沈黙のあることを示す。また、0.2秒以下の短い間合いは「(.)」という記号で示される。
- : : コロンの列: 直前の音が延ばされていることを示す。  
 - ハイフン: 直前の言葉が不完全なまま切れていることを示す。  
 【】 すみつき括弧: 参与者の会話以外の諸行動の一部を示す。

hhh hの列：呼気音を示す。

\*トランスクリプトの発話の上の行にある番号は「画面シーケンスのタイムテーブル」における画面ナンバーに相当する

「画面シーケンスのタイムテーブル」説明



- …顔から個人を特定できる人物が映っている
- …討論者より後ろの席にいる人々が映っている
- …カメラで後ろから映されている

<参考文献>

Jayyusi L, 1984, " *Categorization and the Moral Order* " Routledge & Kegan Paul 1988

" Toward a Socio-logic of the Film Text " *Semiotica* Vol.68, No.3・4 pp.271-96 .

樫田美雄、1998、「ラジオスタジオの相互行為分析 — 平成9年度徳島大学総合科学部  
社会調査実習報告書（第二版） — 」徳島大学総合科学部 社会調査室所蔵。

樫村志郎、1999、「震災報道の会話分析」好井裕明・山田富秋・西阪仰編、『会話分析への  
招待』世界思想社 148-172。

西阪仰、1997、「相互行為分析という視点 — 文化と心の社会学的記述」金子書房。

Sacks, H., 1972, " An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing  
Sociology " in D.N.Sundow(ed.), *Studies in Sozcial Interaction*, Free Press.

= 1987、北澤裕・西阪仰訳「会話データの利用法」『日常性の解剖学』マルジュ社。

高山啓子、1995、「メディアにおける日常的知識の活用 — カテゴリー化の実践 — 」  
宮島喬編、『文化の社会学 — 実践と再生産のメカニズム』有信堂。

上谷香陽、1994a、「相互行為としてのニューストーク — 『パネルインタビュー』の会話  
分析 — 」第67回日本社会学大会（於）同志社大学 一般研究報告（2）理論4 報告  
レジュメ（ミメオ）。

上谷香陽、1994b、「『番組らしさ』はいかにして生みだされるのか — ニュースショーの  
トーク分析」『年報社会学論集』（7）:155-166

上谷香陽、1996、「社会的実践としてのテレビ番組視聴 — ある『事件報道』の視聴活動  
を事例として — 」『マス・コミュニケーション研究』49:96-109。

上谷香陽、1997a、「マス・メディア視聴の社会学的考察に向けて」『年報社会学論集』  
（10）:169-180。

上谷香陽、1997b、「『テレビ・イメージ』の社会的構成 — 見る実践における『討論』の  
組織化 — 」山崎敬一・西阪仰編『語る身体・見る身体』ハーベスト社 235-253。